

仮面の時代 Ⅰ 「仮」であることの意味論

みずしまひさみつ（東海大学）

0. およそ半世紀の逡巡

マスクの日々が3年以上続いた。社会はことさらに対面を求める人々と、もう「顔パンツ」を脱ぐことができなくなってしまった人々との間に、新たな分断線を刻みつつある。表情に覆いをかけることがデフォルトになり、その意味論的な厚みを、われわれは忘れ始めているのか、いずれにせよネット環境で日常化した、脊髓反射的の言葉がぶつかり合うストレスの中で、何らかの思考が組み替えられてしまったことは確かだ。

しかし「さてよ」と思う。われわれ人間は有史以来、顔に対しては常に両義的な態度で接してきたではないか？ 覆いをかけることは情念を穏やかに抑えると同時に、表出を強化することでもあり、そこに心を覗きこもうとする視線を集中させる一方で、空間に乱反射させる鏡の役割をも果たしてきた。ただそれらにかかわる多くの経験、様々な解釈は、別々のコンテクストの中に散り散りになったままだった。

坂部恵が一九七六年に著した『仮面の解釈学』を巡る議論を振り返ると、こうしたクリティカルな認識が、この時期非常に清新であったかを知ることがができる。まだフーコーやデリダが「駆け出し」であり、マルクス主義と日本哲学の特殊性の狭間で、当時の論客たちが概念の擦り合わせをしている様子が眩い。「学際的」という言葉もないくらい原理論的志向が強い中で「記号」概念には、その壁を突破する期待がなされていたことも懐かしい。

この時代を敢えて振り返るのは、我々には未だ、その概念を上手く使えていないもどかしさがあるからだ。坂部たちが「仮面」を対象に問おうとしたものは、一見「近代的自我（アイデンティティ）」の切り崩しに収斂しそうで、実はこのシンポジウム（『仮面の時代』）の議論は、かなり拡散的である。シンボル、システム、メタ言語といったワードたちにその予感を覚えつつも、だがその相互の距離感は、対話者同士で十分共有できていない。

二〇二〇年代の「いま」がなお、そこで止まったままなど乱暴なことを言うつもりはない。しかし、様々な「ことば」が飛び交う中で、残念ながら概念的なポキヤブラリー、日常言語、テクニカルタームの間を詰める作業が疎かになっていたことは、正直否定できない。

1. MASKとFACE——「おもて」の対義語について

亡き元首相を揶揄する意図は毛頭ないが、「アベノマスク」のことはずっと気になっていた。単純な「語音転換（スプーナリズム）」といえども、それまでも、「エコノミクス↓アベノミクス↓アベノマスク」と入れ替わっていくさまは、シンボル操作の手順が、ご丁寧に開示されているかのようで滑稽に見えた。小さな布製の衛生マスクは、ウイルスを防ぐ機能においても、政府の権力誇示の点でも実に中途半端だった。

あのマスクと「顔」の不釣り合いは、それ故に意味深ですらあった。常日頃「メディア露出」に並々ならぬ意欲で臨んでいた元首相のぎこちない表情は、気乗りがしない感染症対策へのメタ言語を印象づけた。そして八年を越える在任期間中、どれだけのスキャンダルを重ねても揺るぎもなかった政権が、いとも簡単に崩れた。まさかあのマスクが、彼の「ペルソナ」を奪う「蜂の一刺し」であったというわけでもなからうが。

思えば、感染症流行以前から、ファッションアイテムとして重宝されていたマスク。ネットのメイク動画とともに「理想の顔」の商品化の影の立役者だった。マスクは確かに直接的には「顔を覆う」ものである。しかしそれは時に「顔の一部」となり、あるいはその機能を強化し、あるいは意味の表出を变調させるトリガーともなる。この「面」（おもて）の記号作用は、MASKとFACEの語を連続する一線上に並べてみせる。

「おもて」は「表」であり、未だ認識されざる「裏」、すなわち内なるもの（潜勢態∥デュナミス）の不安定なありようをそのまま含意する。よってそれは、作為を仄めかす「語り」の契機としても現前する。「アベノマスク」もそういった徴（しるし）の類であった。ともあれ、元首相が演じてみせたMASKとFACEの間で意味が横滑りしていく芝居は、真ん中に穴が開いた現代的な象徴界にさまよう記号の過剰さに満ちていた。

坂部恵は『仮面の解釈学』で「〈おもて〉とは〈主語にならない述語〉

であり、また、〈意味されるもののない意味するもの〉と提起したが、それはすなわち、西欧的な「アイデンティティ・クライシス」の議論の膠着の外にある「人称代名詞の基礎的な体系の圏外」を指し示す斬新さがあった。そしてそのリアリティは、「あの頃」よりも二〇二〇年代の社会の中の方が、見つけやすくなっているように思う。

2. 「素顔」の表皮を剥ぐ——「環境世界論」とアフオーダンスの接点

『仮面の解釈学』では、この〈おもて〉に関する語義の広さについて重要な指摘を行っている。例えば能楽では、〈面〉と〈直面（ひためん）〉は機能的には同じものとして扱われている。すなわち「仮面」と「素顔」には質的な連続性があるのだ（十五頁）。それは坂部によれば〈思い〉と〈おもて〉の音と〈かたち〉〈かたり〉の音の組が指し示すように、内なるものと表出の媒介たるものの相互作用の範列・外延を成している。

この働きに注目する限りでは、「仮面（ペルソナ）」と日本語でいうところの「おもて」の間には、決定的な違いはない。確かにコメディ・デラルテやカーニバルにおける仮面を用いた演出と、能面の存在感は異なる。全く正反対を向いているようにも見える。しかしそれは、ある共通基盤の上に施された、表出のエネルギーあるいは装飾モードが、いかに他者に向けて組織されているかの差のように思われる。

もちろんこの印象の見かけの多様さは、各々の芸能の文化的背景を考えれば、重要な意味をもつ。喜劇から悲劇に至る物語構造のグラデーシヨンや演じられる空間の開けと閉じの対称性は、すなわち、「顔を覆う」ことから「装う」ことへのコード転換を介して、社会的なコミュニケーション過程に解釈を広げる重要な役割を成しているからである。と同時に、分析の目を「素顔」という対象へのこだわりから開く参照項ともなる。

裸の「顔」には感覚器官が集まり、表情を創り出す細かな筋肉も発達している。よって情報量が大きい。しかしだからと言ってこの身体上部の何か所に意味解釈を切り詰めることは、ある種の合理性欲求に無自覚に従うことに等しい。実際の我々の日常生活は、顔から身体全体へ、身体から環境へと広がる世界との、フィードバックループの中にある。「素顔」を「仮面」で覆うことは、その一つの制御の過程であるということができる。

廣松渉は、この表出―解釈過程に注目し、そこに主―客に引き裂かれた関係を越えたユクスキュルⅡハイデガー的「環境世界」概念を宛てていた。（『表情』一九八九年）。この「表情現相の遍在」論はやや忙しくはあるが、風景論からアフォーダンスまで涉猟し、その大小はゲシュタルトの差に拠ると結論づける。当時の理論的評価はともあれ、今日流行している「情動」概念の生成を基礎づけるような、文理の境界への言及には驚かされる。

3. 「仮面」の「仮」に宿る意味

廣松の「表情」論の核心は、その可視化しにくい「成分」のあり様を含め、人間の共同性の構築がどのように行われるか記述することにある。共振、共感から最終的に「共軛的理解」に到達するプロセス―それは、自我・他我関係を結ぶ認知・伝達のメカニズムを解くことであり、それは彼の思想が到達した「世界の共同主観（間主観）的構造」の土台を成すものであると位置づけることができる。

マルクス主義の重要概念（「類」「物象化」など）を、日本語話者としての日常的思考を踏まえながらも、独自のアプローチで基礎づけようとする廣松の身構えは、欧米で一九九〇年代から盛んになっていった「言語」から「認知科学」を介して「身体と心」の関係を問う哲学の潮流を先取りしていた。しかし残念ながら、その後爆発的に拡大する情報技術が身体そのものを作り変えていく未来は、まだ廣松の射程に入ってはいなかった。

今日、ロボティクスやAIなどに代表される情報技術の発展は、哲学の中心にあった「人間」に対する問いのあり方そのものを揺るがしている。だがサイバネティクスが心理学と生反応の境を取り払って以降、我々はかえって逆に過剰に「人間らしさ」を意識するようになったようにも思う。そうなると「表情」を「環境」に拡張した廣松の思索とは全く反対に、我々が「顔」に意味の手がかりを強く求めようとするのは、当然に思えてくる。

そうなのだ、「仮面」の「仮」とはTemporary、すなわちそこを情報が通過する刹那の時間とのかかわりをも表していたのだ。ハイデガーに戻るならば、それは全ての意味の基点をなす「現存在」の危うさを体现している。「現存在」(Da-sein)において我々は、有限な「脱自」の「時間性」と無限な「通俗的時間概念」を交叉させ、公開性をもつ「世界時間」と「類

落（意識から時間性を逃す）」との幅をもって、自らの時間を生きる。

「仮面」には「素顔」との連続性に加え、瞬間的な力動性がある。それらが我々対し、生きていく限り「つねにすでに仮であり続ける」宿命を教えるのだ。しかし一方「仮面」は、そこから目を逸らす手段としても働きる。ゆえに伝統からポピュラーカルチャー、特撮ヒーローから「不気味の谷」に至る、様々な文化ステージに遍在する。そしてこの多様を極める現象は、「人間」なるものの同一性を穿つひび割れとして表出するのだ。

4. 「人称」の問いの現在形へ

「仮面」の現れは、確かにアイデンティティや人称性の問題を提起する。しかし、それは「仮面」の側ではなく、むしろそれが現れざるをえない状況や環境に問いの矛先をむけさせる。この反転は、極端に言えば、これらの概念自体の「仮面性」が蓋をしてきたもの——「人間」がその「らしさ」を了解するに至る、数々の議論のステージへと、次々に我々を導き、問いは螺旋を描いて連鎖していくように感じる。

そこに連なるものは何か——第一に「複数性」の問題がある。我々は「単独」に存在はしていない。しかしだからといって「複数の自我」の合成によって成立しているのか。第二に「共同性」の問題。先の問いは、次に他者（他我）との関係性を成立させるものは何かに展開する。そして「認知と情報処理の問題」、すなわち「顔」の感覚⇨表出の器官間の機能の近さと情動の発生のメカニズムについて。最後に、存在の「有限性」の問題。具体的に言えば、我々は「生と死」といかに向き合うのか——と。

例えば、「仮面」は得てして憑依や変身という特異な出来事とともにあり、また「表す・隠す」といった強化投射メタファーをつかさどり、そして何より「眼差し」という最強の指示詞を際立たせる役割を担っている。それは今日においては、専らメディア的なインターフェース機能として議論されていることである。そう思うと、情報技術の進展とパンデミックが絡みあった時期を過ごした、経験の意味を考えずにはいられない。

対面を代替しつづけた ZOOM の画面、そこに並んだ平面化した表情や名前だけのマス目もまた、ある意味「仮面」機能の一面ともいえよう。オンライン飲み会、Clubhouse などの音声メディア、「うちで踊ろう」など

のブームはあっという間に廃れたが、一方これらから「特別」さが消え、TikTok等のショート動画は溢れ、Vチューバーの「中の人」が普通に「転生」を繰り返すようになった今の方が、〈おもて〉は多層化した気がする。

ということは――これらの現象を、遍く「仮面的だ」と言って終わってしまつては、思考停止に甘んじることに等しい。現代的な「仮面」が、物理的にも情報的にも拡散を加速させている渦中で、かつての「仮面」が問いの前面に立てていたアイデンティティや「ところ」を、どのような設問のテーブルに置き直せばいいか、それ自体が問われているのかもしれない。

今回はそれを、室町の昔から、近未来までの長い時間的連続線を引いて、その普遍性を考えてみたい。新たな「仮面の時代」の始まりにおいて、どんな「記号的」な手がかりが得られるだろうか。二日間の大会を通じて、様々な議論が展開されることを期待したい。